

付載 兎沢古墳群9号墳の壁画の発見について

所長 齋 藤 忠

I

本研究所在、静岡県島田土地改良事務所の委託によって調査している焼津市笛吹段古墳群及び兎沢古墳群については、既に、本誌5号～8号に紹介されてきた如くである。兎沢古墳群は、10基より成っており、今回調査したものは、この中の4号墳であったが、これらの古墳群を巡見している間に、はからずも9号墳の石室に壁画のあることを確認した。この確認は、私が10月21日に、副所長長田実氏等とともに、現地を訪れたとき、なされたものであった。

私は壁画の題材の重要性にかんがみ、10月30日香川県出張の途次、再び現地に行き、調査部長植松章八、所員佐藤達雄、佐野五十三、足立順司、及川司の諸氏とともに、拓本を作製し、写真を撮影するなどの操作を行いつつ、つぶさに壁画を観察したのであった。

II

この9号墳は、10号墳とともに、山稜近くの高い位置に立地し、ほぼ南面する横穴式石室であるが、墳丘の大きさは 15.7×13 mほどに観察される小円墳といえる。石室も、玄室のみの一部が残されているだけで、天井石は失われている。奥壁は、二枚とも完存し、玄武岩の石材を利用している。上石と下石との間隙には小さい割石が充填されている。側壁は、奥壁に向って右側壁において奥壁に接する部分だけ数段の石塊が積まれた形状がうかがわれる。左側壁は、全面的に比較的よく残されており、ほぼ5段に細長い割石を横に長く積んでいることがわかる。両側壁とも、やや内傾斜し、ことに右側壁は、倒壊の危険も感ぜられるほどである。床面にはかなり土砂がおおわれて、その構造は明らかでない。玄室の長さ3.50 m、幅1.20 m、高さは奥壁の残存石材から考えると、約1.70 mに推定される。

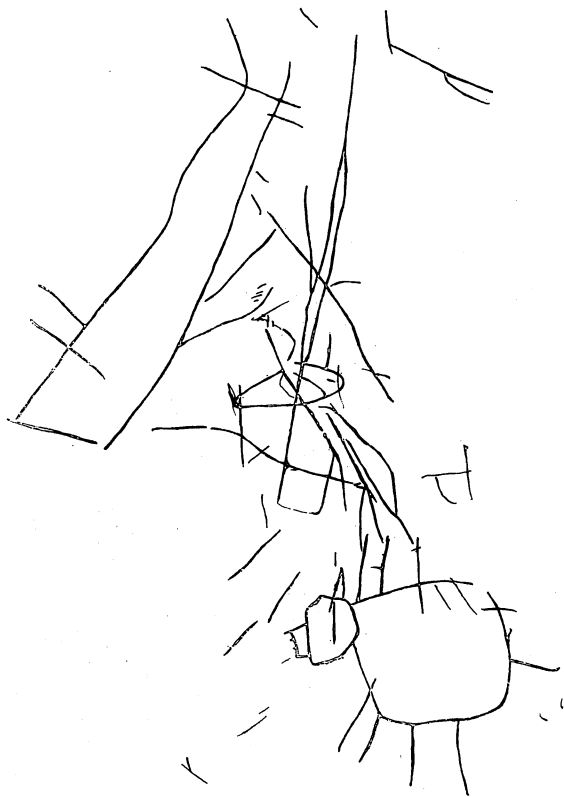
壁画は、奥壁の下段の石材に線刻されている。この石材は、1辺1.10 m四方のほぼ方形をなすもので、若干剥落の面もあるが、平らかな面をなす。剥落も亦、当初からのものとみとめられる。絵画は、その主題を剥落面をさけて、平らかな面を利用して、横45 cm、高さ60 cmの範囲内に、巧妙な斜め配置を見せている。すなわち、床面から約20 cmぐらい上位の、平らかな面には、猪像を彫刻しており、その尻部の一端は、剥落面にも及んでいる。その斜め上には、飛翔する鳥、その上の横に二本の樹木が見られる。線刻の技法は、鋭利な鑿状のものでなされた如く、鋭く刃痕がはいっている。

III

猪の図は、2本の前肢を前斜めにのばし、体は太く、尾も耳も見られる。猪の特色としての鼻の先端は、厚板をとりつけたような状態であらわされている。背上の2、3本の斜線は豪毛だろうか。猪の動物学上の外形の特色は、体形はずんぐりし、頸部が短かく、四肢も短かく、かつ鼻の先が円盤状になっているといわれているが、その絵は、その外形的な特色を見事にとらえている。鼻端から尾部までの全長23 cm、丈は尾をふくめて約13 cmぐらいと測られる。

飛翔する状態をあらわした鳥の図は、羽翼を左右に張りのばし、尾羽はながく、なだらかにあらわし、その線の先端は、ことさらに細く尖らしている。全長20 cm、羽翼の幅14 cmである。山鳥か雉のようなものをあらわしたかも知れない。木は、向って左のものは太く、右のものは、中央の幹が中ぶとりしている。上に枝も見られる。高さ約40 cmぐらいである。

なお、猪像は、床面から約20 cmぐらいの高さの位置に彫刻されていることも、一つの特徴である。この奥壁の下端で鑿を使って彫刻する場合、腹ばいになるなり、かなり身体を前屈みにしなければ不可能



第40図 兎沢第9号墳壁画

(『南方熊楠全集』一所収)を見ると、猪は好んでまむしや蛇を食する動物であり、それから発展して、これらを退ける霊力あるものとされていることが述べられている。それで地方によっては、子供が家を建てるとき、しきいをまたがぬ中に、「まだらむしや、わがゆくさきへ、ゐたならば、山たち姫に知らせ申さん」と三遍となえれば、蛇にあわぬという俗信のあることも紹介している。「まだらむし」は蛇であり、「山たち姫」は猪という。もし猪に、辟邪的な意味が、古代にもあったとすれば、この絵を、恐らく死者の枕辺のそばであったろう奥壁下端に画かれた意味も了解される如くである。

鳥が、靈魂を運ぶという思想が、古代人の間にあったことは、折口信夫博士の多くの論稿の中にも記されているものであるが、空中を軽快にかつ迅速に飛んでいる状態をからわす、この壁画の鳥も亦、このような古代人の精神生活の一端を示したものと考えられないだろうか。

V

日本の装飾古墳といわれるものには、石棺、横穴式石室、横穴などの各種のものの図文を包括しており、その図文にも、色彩のもの、彫刻のもの、彫刻に色彩をほどこしたものなど各種がある。この中で、横穴式石室の線刻画で、図文の鮮明なものは比較的少い。しかも、動物画としては、馬、鹿、犬などがあるが、猪として明確なものは、これまで発見されていない。本古墳のように、堅硬な石材の面に、鮮明に自由画的に彫刻し、しかも、積築以前に既に彫刻したとみなされる例の検出されたことは、飛翔する鳥の図と共に貴重である。

この発見の報を、焼津市当局にもたらしたとき、市教育委員会においては、地主大石裕氏の好意にもとづき、応急な保存対策を構じた。県教育委員会文化課と市当局と地主大石氏の文化財保存に対する適切な措置に感謝するとともに、本古墳が、貴重な文化遺産として、永く保存され活用されることを希望したい。

(静岡埋蔵文化財調査研究所だよりNo.9より転載)

であり、むしろ、石材にあらかじめ彫刻し、のちに奥壁に据えたと考える方が自然であろう。

IV

さて、猪の明確な図は、日本壁画古墳の画題としては「新種」である。飛翔する鳥をあらわしたものは、若干あるが、本図のように、尾翼をのびし、いかにも軽やかに、かつ速やかに空中を舞いぶような図柄は、他に見られない。

一体この古墳の被葬者、或いはその関係者は、どういう意図で、これらの絵を、奥壁に彫刻したものであろうか。

猪の場合、四つの考えがある。その一つは、単に自然風物を画いたとする考え、その二つは、被葬者が何等かのかかわりあいをもったとする考え、例えば、家猪として飼育していた猪をあらわしたなど、その三は、猪を供献したとする考え、その四は、猪に辟邪的な意味があったとする考えである。もし、私見を述べるならば、その四を適切としたい。猪は、民俗学的な立場から見ると、まむしや蛇などをしりぞける呪性をもつとされている。

たとえば、南方熊楠氏の「猪に関する民俗と伝説」



第41图 兔沢第9号墳壁画拓影